

2016年7月22日
国境なき医師団 (MSF)

ヨルダン：シリア人紛争被害者の医療搬送を要請——北部病院で外科部門を新設し受け入れ体制を整える

ヨルダン北東部国境沿いでヨルダン兵 7 名が自爆攻撃により死亡したことを受け、ヨルダン北のシリア国境は 2016 年 6 月 21 日以来封鎖されている。国境なき医師団 (MSF) はシリア国境まで 5km のラムサ国立病院において救急外傷外科プロジェクトを行っているが、国境の封鎖によりシリア人負傷者は来院していない。MSF は多数の負傷者を治療するための新しい外科部門を開業するとともに、閉鎖された国境からシリア人紛争負傷者を医療搬送させることを求めている。

生き延びるチャンスを奪う国境封鎖

ヨルダンで MSF 活動責任者を務めるルイス・エギルスは「紛争により重傷を負った特に状況の深刻な被害者たちは、国境閉鎖のせいで生き延びるチャンスを失ってしまいます。再びヨルダン入国が認められなければ、緊急を要する救命医療も受けられません」と訴える。

国境封鎖前、シリア南部の戦闘激化により、ラムサ病院では極めて重篤なシリア人負傷者の受入が増加。MSF は救命外科と術後のリハビリの水準や質を高めるため、新しい部門の立ち上げを決定していた。ラムサ病院では 2013 年 9 月の開始以来、ヨルダン保健省との緊密な連携のもと、1062 人のシリア人患者 (うち 23% が女性、36% が子ども) を治療し、800 件余りの大手術を行っている。

シリア国内の保健医療システムが過去 5 年の無差別的な戦争で瓦解しているだけに、ヨルダン北の国境閉鎖と負傷したシリア人の拒絶は、傷病者保護について深刻な懸念をもたらす。エギルスは「ヨルダン当局に紛争負傷者への配慮を保つよう求めます。そうした配慮が、これまでも老若男女の多くのシリア人の命を救ってきたのです」と話す。

既存の施設は地元の医療向上に活用

MSF はラムサ病院に新設した外科部門で、極めて重篤な負傷者を受け入れる用意をしている。新しい部門の開業は、地元の医療ニーズへの対応も向上することが期待される。ラムサの MSF プロジェクト・コーディネーター、ミカエル・タロツティは「MSF の医療チームが使っていた既存の手術室はラムサ病院に移管され、産科専用となる予定です。これにより、ヨルダン人女性のプライバシーがより尊重され、保護、自立性、病院利用が向上するでしょう」と話す。

シリア紛争の勃発以来、これまでに 400 万人を超えるシリア人がヨルダンなどの周辺諸国に避難した。MSF は、首都アンマンにおける再建外科プログラムを立ち上げた 2006 年 8 月からヨルダン国内で活動を継続し、2013 年以降はラムサ病院の救急外傷外科プロジェクトを展開。同地とイルビド市における母子病院と非感染性疾患プロジェクト 2 件でも、シリア人難民と受入地域のヨルダン人困窮者を援助している。


以上

本件に関するお問い合わせ先：

特定非営利活動法人 国境なき医師団日本 広報担当：舘 俊平／趙 潤華

TEL：03-5286-6141／6153 携帯：090-5759-1983 FAX：03-5286-6124

E-mail: press@tokyo.msf.org <http://www.msf.or.jp>

 メディア向けツイッターアカウント：@MSFJ_Press